

文武両道の教育者 笹森順造

ささもりじゅんぞう

笹森順造は、一八八六年（明治十九）五月十八日、父要蔵、母さかの末子（六男）として若党町四十九番戸に生まれた。母のお腹にいた時から散々暴れたので、今度はきつと男だろうと思っていた母は、順造の誕生を人一倍に喜んだ。

順造は、小さい時から剛胆な子だった。その頃母のさかは、毎日縁側に鏡台を出して髪を整えたが、時には剃刀で眉を剃った。順造はいつも母の傍でそれを見ていた。ある時、母が髪を洗いに立ったあと、順造はそこにあつた剃刀を手にとると、鏡を見ながら自分の眉に剃刀をあてた。三歳の幼児に剃刀など使えるわけがない。額を切って赤い血がタラタラと流れた。そこへ母が戻り、驚いて剃刀を取り上げ、血止めの手当をしてくれたが、順造は泣きもせず、

「アカ（血）が出た。」

といてじつと目をつむっていた。これを見た母は「この子はキツイ（我慢強い）子だが、無鉄砲な事をしたがるのでは？」と心配したという。

順造は、数え年六つで時敏小学校に入学したが、成績は特に良くも悪くもなく至って平凡だった。しかし母の躰で学校へは休まずに登校

し、無遅刻無欠席で、精勤賞だけは毎年貰っていた。

父の要蔵は、津軽藩の御武庫奉行を勤めた宝蔵院流十文字槍の使い手だった。家の座敷の押入れにある刀箆筒には刀剣がいっぱいつまっており、なげしには大きな槍がかかっていた。こんな環境で育った順造は、七歳になると当然のように、兄達を通った長坂町の北辰堂に入門した。これが順造の小野派一刀流との出会いであり、その修業は一生続く事になる。

県立一中（現弘前高校）に入ってからでも勿論剣道は続けた。冬の朝、寒稽古に通った時の事を、順造はのちにこう回想している。

「がばっと跳ね起き、襦袢から着替えるのだが、冷たい肌着を身につけるのに身震いしながら、母に教えられた『お山大将不動明王』の呪文を三度唱え、身体をこすってから着ると少しは我慢が出来た。それから流し場に行って昨夜水を汲んでおいた水桶を見ると、凍りついて顔を洗えない。井戸端に行き釣瓶で水を汲み上げると湯気が立っている。湯気の立つ水で口をすすぎ顔を洗い手拭いを絞って置くと、手拭いはすぐ板のように凍ってしまふ。竹刀を担ぎ藁ぐつを履いて家を出ると、昨夜からの雪が三尺（九十糎）ほどもつもっている。雪の中を素足空脛で歩いていった。このときに左足の親指が凍傷をおこし、爪がはがれて山型の壁が出来たが、治らず今も変形したままになっている。」

このようにして厳しい稽古に打ち込んだ順造は、十五歳の時にキリスト教の洗礼を受けている。これは、兄宇一郎の影響によるものだった。

長男の宇一郎は、一八八五年（明治十八）東奥義塾を卒業後渡米、インディアナ州のデポー大学（珍田捨巳や佐藤愛磨の留学した大学）に

入学したが、その時に洗礼を受けて熱心なキリスト教徒となった。笹森家の最初のキリスト教信者である。以後宇一郎は、家族の者達へもキリストの教えを説き、入信をすすめた。この影響で一八九五年（明治二十八）に母が、三年後に父が洗礼を受けている。九歳の頃から母に連れられて日曜学校に通い、讃美歌を歌い牧師の説教を聞いてきた順造も、当然の事のように洗礼を受けると、キリスト教青年会に入り、伝道の仕事に参加したのだ。

このように順造は、剣道場に通って体と心を鍛えながら、一方では十字架の旗を押し立て、街頭に出て伝道活動をしたのである。文字通り右手には剣を、左手には聖書をとった順造だが、剣の道と信仰の道に共通する、何かを感じとっていたのではなからうか。

県立第一中学校を卒業した順造は、進学のために上京した。一九〇五年（明治三十八）四月の事だ。上野駅には兄の佐吉郎が迎えに来てくれた。順造は早速高杉瀧蔵の家を訪れた。高杉は順造と同じ弘前の出身で、生れた家も近かった。当時高杉は早稲田大学の教授だった。順造は「東京に出たら、先ず高杉さんに会って相談しなさい。」と父に言われていたのだ。

高杉は喜んで会ってくれた。そして、

「君の将来の志望は何か？」

と聞いた。順造は、

「兄たちは、私に軍人か役人になれといいますが、軍人は人を殺さねばなりません。また役人は横柄おうへいに構えています。私はどちらも嫌いなので、できれば政治家になりたいと思います。」

と答えた。高杉は笑いながら、

「軍人も役人も嫌いだとは気に入った。政治家が希望なら早稲田の政治科に入るといい。そのため受験勉強をしつかりやりなさい。」

と励ましてくれた。

翌年早稲田大学予科に入学した順造は、直ちに剣道部に入部した。しかし新生の順造の名札は、最下級の「七級下」の所にかげられた。七歳の時から竹刀を振ってきた順造は、剣道には大分自信があつたのだが、その実力を発揮する機会のないまま、最下位の「七級下」に甘んずることにした。やがて部内の定期昇級試験が行われた。それをまっていた順造は、対戦した七人をたて続けに薙倒なぎして部員達を驚かせた。

この結果、いきなり五段階とんで「六級の中」へと昇進した。そして「早稲田に、弘前出身の笹森あり。」と皆から注目され、やがて早大剣道部の主将キャプテンとして部を統率することになるのである。

大学を卒業した順造は、早速アメリカへ留学しようと、当時長崎の鎮西学院院長だった兄の宇一郎に相談した。が、「今すぐ渡米するより

は、しばらく実社会に出て経験をつんでからの方が良い。」と言われたので東京新公論社に入社し、主筆として政治、経済面に活躍した。

やがて一九一二年（明治四十五）一月、念願だった渡米留学が実現した。兄達から頂いた四百四十円（二百二十ドル）を懐中に順造は横浜から船に乗った。このとき順造は、剣道の防具と、五十本の竹刀を持つ事を忘れなかった。アメリカに行っても剣道をつづけるためだった。

しかし、船賃や汽車賃などを支払ってコロラド州デンバーへ着いた時、財布の中には僅か^{わず}二ドル五十セントしかなかったという。

苦学しながらデンバー大学院に進んで研究を続けていた順造は、アメリカ各地での剣道大会にも積極的に参加して剣道の振興に努めていたが、ある時、博徒^{ばくと}の親分で吉野という者が順造に試合^{いど}を挑んできた。当時のアメリカには、日本人の博徒が大勢いて、自己防衛と闘争のため、熱心に柔道や剣道を習う者もいたのだ。

試合を挑まれて相手になった順造が簡単にあしらうと、吉野は大そう驚き、「なんとかして我々の大親分になってくれ。」と真顔になって頼みこんできた。順造が、

「君達が賭博をやめるなら、なってもいい。」

と答えると、吉野はいよいよ本気になって、

「賭博をやめる。だから是非大親分になってくれ。そして、日頃我々日本人を、ジャップと馬鹿にしている人たちへの恨みを、一緒に晴らそうではないか。」

と言うので、順造は吉野を教会へ連れていき、まず牧師の話聞かせてから、「剣は人を倒す凶器ではなく、自分の罪や穢れけがを切り払う宝器である。」と諄諄じゆんじゆんと訓きこした。のちに順造はこの時の事を

「こうして私は、一攫千金いつかくせんきんの博徒の親分にはならず、一苦学生として過ごしました。」
と語っている。

一九二一年（大正十）のある日、ロスアンゼルスにいた順造は、東洋宣教師監督のウェルチ博士の訪問を受けた。当時順造は、南カリフォルニア中央日本人会書記長の仕事をしていた。

「ミスター笹森、どうか弘前に帰ってくれませんか。そして、東奥義塾の塾長になって下さい。」

「え！ 東奥義塾ですか？」

「そうです。東奥義塾は、アメリカメソジスト教会が資金を出して、再興する事になりました。」

一八七二年（明治五）に創立した東奥義塾は、藩学校を母胎とした由緒ある学校だが、明治末期の頃は県立弘前中学東奥義塾として運営し

ていた。当時の弘前には、県立一中（現弘高）と義塾と、県立の学校が二校あったため、同じまちに二つの県立校は要らないという意見から、大正二年を最後に義塾は廃校となっていたのである。

「塾長の条件として三つあります。まず弘前の人である事。次に、日本とアメリカ両国の大学を卒業した人。そして、キリスト教徒である事。これらの条件を満たすのは、ミスター笹森、貴方しかおりません。」

ウエルチ博士の熱心な説得に対し、順造はいろいろ考えた末、郷土の青少年教育のためにわが身を捧げる決意をした。塾長になるのを承諾したのである。

一九二二年（大正十一）二月十日、十年間のアメリカ遊学を終えて弘前に帰った順造は、久しぶりに見る雪の岩木山に胸が熱くなった。駅前には大勢の知人や友人が出迎えてくれていた。その中から、顔見知りの宣教師アイグルハート博士が進み出て、

「弘前は貴方を歓迎します。」

と握手した。生まれ故郷に帰った自分が、アメリカの人からこうした挨拶をされて順造は、嬉しさと戸惑いとまどの入り混じった妙な気分だった。

このとき順造は、郷里にもどって来たという実感をはじめてかみしめた。

四月七日、再興東奥義塾の開校式は、蔵主町にある旧公会堂を仮校舎として盛大に行われた。順造は三十六歳という若い塾長だった。

新塾長の教育理想は、武士気質と津軽魂の伝統を守る日本精神を縦とし、横にはキリスト教教育の犠牲的精神と自由平等自主自律の心を組み合わせた、十字架をモットーとしたものだった。そしてアメリカ仕込みの新しい教育法をつぎつぎに導入していったのである。試験地獄を解消するために、小学校の成績証明だけによる入学の許可。成績別のクラス編成。メンタルテストの実施。単位時間の採点。自由な服装（背広）とネクタイの色による学年の分け方。などである。この他に、関教頭のダンス指導や、外人教師シャックロックの英語教育など、地方の学校ではとても見られない事ばかりだった。このため「義塾の教育は規律もなく、あまりにも自由主義だ。」とか「アメリカ化教育の手先だ。」などと非難する者もあったが、塾長としての笹森は、自分が理想とする教育方針を貫いたのである。

キリスト教主義の教育を進めるため、順造は礼拝の時間や校内伝道、東奥聖社などを設置した他、夜間市民大学講座を開くなどして、教育活動を広めていった。

順造は剣道を義塾の必修教科とした。そのため「ミッションスクールなのに、剣道が必修というのは変わっている。」といわれたが、これは、稽古館時代から続いた文武両道の伝統を守ったもので、寒稽古の時には塾長が率先して参加しその指導にあたった。

新塾長笹森順造は生徒たちに人気があった。早速「エラ（鰐）さま」という^{あだな}綽名がついた。鰐^{エラ}というのは水生動物の呼吸器の事だが、順造

の顔は両顎の下のところが張っている事から「エラさま」の名が付いたのだろう。昔から「エラの張っている人は意志が強固だ。」といわれるが、順造もまさにその通りだった。以下、当時の生徒達の、エラさまについての思い出をいくつか紹介してみよう。

一年生の夏休みに浅所で臨海学校があった。当時県内の中学校で、林間学校や臨海学校を開き、教師と生徒が寝食を共に親睦を深める事は珍しかった。エラさまは水泳の指導をした。そのため自らふんどし褌と水泳帽をつけ、生徒といっしょに海に入った。溺れた人の救助法や、さめ鯨の攻撃を防ぐ方法まで教えてくれた。夏泊半島を一周した時、海を見ていた私の後ろで鳥の啼きな声ながした。振り返ってみたら笹森先生がいて啼き真似まねをしていたのだった。茶目っ気でやったのだろうが、実にうまい啼き真似だった。

(神 久策)

塾長がまだ奥さまを持たない頃の事である。ある先生の厳しい指導に反発した一部の生徒たちが、学校には行かず公園の本丸に集まった。生徒たちの不穏な動きを知った塾長は早速生徒たちを集めた。「君たち、もし塾長に不平があるなら何でも言いなさい。」と尋ねた。が誰も発言するものではなく、ストライキは不発に終わった。塾長が元寺町の教会で結婚式をされた時、生徒全員(百五十名)も招待した。そのときA組の組長小野君が音頭をとり、大声で万歳を三唱したが、あとでエラさまは「あの時はびっくりした。」と話していた。

(加福重次郎)

昭和四、五年頃、弘前ではまだ自動車の珍しい時。エラさまはアメリカからフォードの中古車を買ってきた。エラさまが払ったのは運賃の五ドルだけだという。放課後になると、ドドロ、ドドロという爆音を立ててエラさまの自動車の練習が始まる。生徒たちは「始まってえ！」と一斉に窓から顔を出して眺めた。車はもうもうと白いほこりを舞い上げ、堀端から師団長官舎（現市役所）の前を通過して、校舎を中心に何回も走らせる。ある日、学校を出ると玄関の前でエラさまがワイシャツ姿で自動車のエンジンをかけていた。L字型の鉄棒をさし込んで力いっぱい回すのだがなかなか始動しない。エラさまは私を見て「一寸回ちよっとしてくれや。」というので、エラさまがやったように鉄棒を握ってみた。運転席でハンドルを握っているエラさまは「思い切って…、力を入れて…：こわくないから。」と指示する。「ヨシ。回せえー。」と汗だくになって何度もやっているうちに、やっとドドロ、ドドロとエンジンがかかった。エラさまは笑いながら「戸沢、乗るが。」と声をかけたが、私は「エーゴス。」と断わった。

(戸沢 誠)

私は一九二四年（大正十三）の入学生だが服装は黒ラシヤのダブルの背広だった。中学校の制服としては珍しかった。入学式の時エラさ

まは、ネクタイの色と制服についてこう話してくれた。「一年生は、小学校から中学校に入ったばかりの赤ん坊だから『赤』。二年生は、小鳥でいえば丁度嘴が黄色になって、まだ親から餌を貰う時期だから『黄』。三年生は日常生活にもなれてきてそろそろ生意気になる若さのあふれた頃だから『緑』。四年生は、いよいよ大人の世界を目指し、大きな希望を抱き始める時期、その意気込みをみせるための『藍』。五年生は、最終学年を迎えて上級学校か実社会へ進む。中学生としてはこの道の玄人になったのだから『黒』とした。また制服を背広にしたのも、詰襟服では、筆記する時襟のカラーでノドが押さえられて学習しにくいので前を開放的にしたのであって、決しておしゃれのためではない。」

(浅利光輝)

このように、生徒達に慕われた「エラさま」は、一九三九年(昭和十四)、望まれて東京の青山学院院長に就任、十七年間の塾長生活に別れを告げて弘前を去った。

一九四六年(昭和二十一)、戦後初の新選挙法(男女同権)による選挙が行われたが、この時立候補した笹森順造は最高位で当選した。一九〇五年(明治三十八)に上京、高杉瀧蔵に「政治家になりたい。」とその志望を語ってから四十年、その夢が実現したのである。以後連続四期(八年間)、ついで参議院に連続三期(十六年間)当選し、政治家としての道を歩む事になる。この間笹森は、片山内閣の国務大臣とし

て入閣、復員庁総裁や賠償庁長官として政務に携わった。

国務大臣になっても、学者的な謹厳で誠実なその勤務ぶりは変わらなかった。朝の出勤は早い。酒も煙草もやらない。夜は遅くまで部屋で読書している。そんな大臣の行動に、官邸の玄関番がすっかり心を打たれた。いつも入口に居て官邸の様子を監視しているのだから、大臣の日常生活も手にとるように知っている。後にこの門衛は自分の孫が生まれた時「どうか名付け親になってほしい。」と大臣に頼んだところ、笹森は、自分と同じ「順造」と付けてやったという。

国会議員として多忙な時にも、竹刀を持つ事を忘れなかった順造は、一九六三年（昭和三十八）、自分の邸内に礼楽堂という道場を作り、毎週日曜日には、小・中学生や一般の剣道愛好者を集めて剣の指導にあたった。翌一九六四年（昭和三十九）の東京オリンピックの時は、デモンストレーションとして日本の武道も公開されたが、七十八歳の順造も、日本剣道界を代表する一人としてこれに参加、一刀流の極意を披露した。またこの年の文化の日には、これまでの功績が認められて勲一等瑞宝章を授与されている。

一九六八年（昭和四十三）七月、政界を引退してからは、剣道場「礼楽堂」の堂師として小・中学生や後輩たちの指導にあたっていたが、一九七六年（昭和五十一）二月十三日に死去した。数え年九十歳だった。

三月十一日、弘前市民会館に、約一千人が参列して、故笹森順造の東奥義塾葬がしめやかに行われた。弘前教会の牧師が「笹森先生は、病

床に伏していた頃も、お見舞いに訪ねて行くと必ずきちんと座って、弘前の事や義塾の事を尋ねた。いつも深く心にかけていたのは義塾の事であった。先生はまさに「愛」の人であった。」と述べた。最後に、義塾を再興した当時笹森が作詞した校歌を一同で斉唱し、偉大だった故人をしのんだ。

一九八七年（昭和六十二）十二月、石川字長者森へ移転した東奥義塾校舎の礼拝堂前に順造の胸像がある。これは、一九六二年（昭和三十）九月十五日、東奥義塾再興四十周年を記念して建立されたものだ。また校舎東側には歌碑が建っている。こちらは、一九七三年（昭和四十八）、順造の米寿（八十八歳）、寿子夫人の喜寿（七十七歳）と金婚（結婚五十周年）を記念して建てたもので、碑面には、夫人が作り、順造が書いたという、次の歌が刻まれている。

わが骨の骨 肉の肉とぞよびましし

その教へ子が 建てし像なり

「わが骨の骨 肉の肉」とは、旧約聖書に出てくるアダムの有名な言葉だが、「自分の骨や肉を分けて育てたような可愛い、その教え子達が建ててくれた像である。」という意味の歌である。

参考文献

笹森順造『剣道と私』一九八六年（昭和六十一）

笹森順造『エラ様を語る』一九八七年（昭和六十二）笹森順造先生生誕百年祭実行委員会

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、二五三～二六五頁